

からは、外務省穂坂泰政務官を団長とした政府団および、京都大学森臨太郎客員教授、池田裕美枝 SRHR Japan 代表理事等多数の有識者が参加した。

人口動態の多様性というテーマの元、ジェンダー平等、性と生殖の健康、生殖の権利はもとより、人口ボーナス、健康な高齢化、ユニバーサルヘルスカパレージ、都市化、気候変動と移動、人口データ、技術革新といった、カイロ会議で採択された行動計画に盛り込まれた人口と開発に関する項目に関しセッションが設けられ、パネルディスカッションと参加者全体による討議が行われた。この会議の結果は、4月、6月のグローバルダイアログ会合の結果と合わせ、9月に国連本部にて開催される、国連未来サミットの協議に反映されることとなっている。

ダッカ会合の会場は、インターコンチネンタルホテルの宴会場であったが、開会式にハシナ首相（当時）が挨拶を行うということで、参加者はみな事前登録しているものの、会場の入場には厳しいボディチェックが行われ、この種の会議としては異様にも感じられた。その3か月後、この原稿を書いている前日8月5日に、ハシナ首相は反政府デモの激化を受けて辞任し、国外に脱出した。独立戦争の闘士の子孫、女性、少数民族に公務員採用における優先枠を設けていたことに学生が反発したことからはまった反政府デモであったが、その背景には高学歴の若者増加に応じた雇用を確保できない「ユースバルジ」がある。子ども、高齢者に対する国際的な取り組みは進んできたが、その間の「若者」に対する施策がなおざりにした付けが回ったといえるだろうか。（林 玲子 記）

日本の外国人労働者政策に関する国際シンポジウム

現在、日本で働く外国人労働者の数は2,048,675人となり、10年前と比べて3倍近くに増えている。日本が本格的な人口減少局面を迎える中、足元の外国人の増加速度は増している。こうした状況を受け、国立社会保障・人口問題研究所と経済協力開発機構（OECD）は2021年より3年間をかけ、日本の外国人労働者政策について主に国際比較の視点から共同研究を実施してきたところ、5月30日にOECDとの共催にてシンポジウムを開催し、その成果を報告した。

シンポジウムは対面とオンラインのハイブリッドで開催され、会場120名、オンライン400名を超える参加者となった。OECD側からは武内良樹事務次長から開会の辞があった他、ジャンクリストフ・デュモン課長、ジョナサン・シャロフ シニアエコノミストらが参加した。当方からは田中誠二厚生労働審議官による開会の辞の他、林玲子所長による閉会の辞、及びパネリストとして川口俊徳外国人雇用対策課長、是川夕国際関係部長が参加した。また、日本経済団体連合会 脇坂大介氏、日本商工会議所 大下英和氏、及び日本労働組合総連合会 漆原 肇氏にパネリストとして参加いただいた。

なお、同事業の成果は6/30にOECDからRecruiting Immigrant Workers Japan: 2024として刊行され、また同翻訳版である「日本の移住労働者—OECD労働移民政策レビュー：日本」が8/24に明石書店から刊行された。（是川 夕 記）

日本人口学会第76回大会

日本人口学会第76回大会は、6月8日（土）～6月9日（日）の2日間、中央大学（多摩キャンパス（八王子市））を開催校として、対面形式で開催された。大会プログラムは以下の通りである。第1日にはシンポジウム「日本におけるマルサス受容と人口論の形成」および学会賞授与式が行われた。また大会前日には「地方行政のためのGISチュートリアルセミナー」が開催された。学会賞授与式

では以下の受賞者および対象業績が紹介された。

学会賞

受賞者：田辺国昭・是川夕／国立社会保障・人口問題研究所

対象業績：田辺国昭・是川夕監修／国立社会保障・人口問題研究所（編）『国際労働移動ネットワークの中の日本』，日本評論社。（2022年4月）

優秀論文賞

受賞者：福田節也・余田翔平・茂木良平

対象業績：福田節也・余田翔平・茂木良平「日本における学歴同類婚の趨勢：1980年から2010年国勢調査個票データを用いた分析」，『人口学研究』第57号。（2021年9月）

普及奨励賞

受賞者：小島宏・和田光平

対象業績：小島宏・和田光平（編著）『セクシュアリティの人口学』，原書房。（2022年11月）

大会前日 2024年6月7日（金）

第8回「地方行政のためのGISチュートリアルセミナー」

<組織者> 小池司朗（国立社会保障・人口問題研究所）・井上孝（青山学院大学）

<座長> 草野邦明（群馬大学）

- 1) 川瀬正樹（広島修道大学）「無料で使えるGISとGISリカレント講座の紹介」
- 2) 川村壮（北海道立総合研究機構北方建築総合研究所）「GPSデータを用いた津波避難訓練動画の作成と避難対策の提案」
- 3) 長谷川普一（新潟市）「災害対応へのGIS活用事例」
- 4) 井上孝（青山学院大学）「全国小地域別将来人口推計システム」を用いた洪水浸水想定区域の人口分析」

第1日 2024年6月8日（土）

企画セッション2「新型コロナウイルス感染症に関連する死亡分析」

<組織者・座長> 西浦博（京都大学）・石井太（慶應義塾大学）

- 1) 別府志海（国立社会保障・人口問題研究所）「新型コロナウイルス感染症の複合死因分析：2020～22年」
- 2) 田中宏和（国立がん研究センター）「COVID-19パンデミックにおけるわが国の死亡率の動向」
- 3) 菅桂太（国立社会保障・人口問題研究所）・小池司朗（国立社会保障・人口問題研究所）・藤井多希子（国立社会保障・人口問題研究所）・石井太（慶應義塾大学）「市区町村別にみた死亡率は2020年以後変化したのか？」
- 4) 岡田雄大（京都大学）・西浦博（京都大学）「2019-22年のCOVID-19流行下の出生時平均余命の変化」
- 5) 石井太（慶應義塾大学）・別府志海（国立社会保障・人口問題研究所）・菅桂太（国立社会保障・人口問題研究所）・堀口侑（慶應義塾大学・院）「月別に拡張した「日本版死亡データベース」による死亡率の期待値と実績値の乖離分析」
- 6) 西浦博（京都大学）・岡田雄大（京都大学）「死亡者の遺族追跡調査を通じた死亡メカニズムの

分解]

- 7) 林玲子 (国立社会保障・人口問題研究所) 「2022年からの死亡増加は突然死の増加によるのか」

自由論題 A-1 「労働と格差 1」

<座長> 玉置えみ (学習院大学)

- 1) 永瀬伸子 (お茶の水女子大学) ・臼井恵美子 (一橋大学) ・エカテリーナ ヘルトグ (オックスフォード大学) ・キンセン (お茶の水女子大学・院) 「家事・ケアの自動化技術に対する消費者需要: 現実の労働時間や収入でどう異なるだろうか」
- 2) 大森義明 (横浜国立大学) ・永瀬伸子 (お茶の水女子大学) ・エカテリーナ ヘルトグ (オックスフォード大学) ・臼井恵美子 (一橋大学) ・江天瑠 (お茶の水女子大学・院) ・ルル シー (オックスフォード大学) 「家事・ケアの分担および自動化技術利用に対する消費者需要: Vignette 調査からみる仮想的な賃金、労働時間、価格変動による選択の影響」
- 3) 四方理人 (関西学院大学) 「日本における相対労働所得移動の研究」

自由論題 B-1 「理論と方法」

<座長> 鎌田健司 (明治大学)

- 1) 北原昌嗣 (総務省統計局) 「国勢調査における CANCEIS による不詳補完値の試算」

自由論題 A-2 「労働と格差 2」

<座長> 佐藤晴彦 (平成国際大学)

- 1) 湊麻紀子 (神戸大学・院) 「66年コーホートのライフコースーコーホート効果と機会の大小ー」
- 2) 斉藤知洋 (国立社会保障・人口問題研究所) 「非婚シングルマザーの社会経済的地位と生活機会」

自由論題 B-2 「結婚と性」

<座長> 小西祥子 (東京大学)

- 1) 岩澤美帆 (国立社会保障・人口問題研究所) ・余田翔平 (国立社会保障・人口問題研究所) 「1982年～2021年における未婚の類型ー「前駆型」「解放型」「剥奪型」「離脱型」の構成変化とその特徴ー」
- 2) 小島宏 (早稲田大学) 「20世紀末の大学生における性行動と「性暴力」被害等の関連」
- 3) 森木美恵 (国際基督教大学) ・松倉力也 (日本大学) 「性的欲求度と生殖行動の相互作用について」

シンポジウム 「日本におけるマルサス受容と人口論の形成」

<組織者> 佐藤龍三郎 (中央大学)

<座長> 和田光平 (中央大学)

<討論者> 林玲子 (国立社会保障・人口問題研究所) ・廣嶋清志 (島根大学)

- 1) 吉野浩司 (鎮西学院大学) 「マルサス人口論はいかに受容されたか: 「マルサス生誕150年記念講演会」(1916年)に着目して」
- 2) 牧野邦昭 (慶應義塾大学) 「高田保馬の人口論」
- 3) 杉田菜穂 (大阪公立大学) 「戦前戦中期日本の人口・社会政策論」
- 4) 柳田芳伸 (長崎県立大学) 「戦後日本における人口論の形成ーマルサス人口論に対する南・市原両教授の所論を手掛かりにしてー」

第2日 2024年6月9日(日)

自由論題 C-1「出生1」

<座長> 安田公治(青森公立大学)

- 1) 増田幹人(駒澤大学)「少子化対策の効果と地域特定要因の検証—都道府県別データを用いた分析—」
- 2) 松田茂樹(中京大学)・鎌田健司(明治大学)「自治体が実施した少子化対策と出生率変化の関係」
- 3) 薄井晴(筑波大学・院)「都市雇用圏内における出生力の地域差に関する分析」

企画セッション1「女性の教育とキャリア」

<組織者> 打越文弥(プリンストン大学)

<座長> ジェームズ レイモ(プリンストン大学)

<討論者> 水落正明(南山大学)・岩澤美帆(国立社会保障・人口問題研究所)

- 1) 眞鍋倫子(中央大学)「職業教育と女性の職業キャリア—専門学校卒業者を中心に—」
- 2) 麦山亮太(学習院大学)「日本における賃金の軌跡に対する母親ペナルティの学歴差」
- 3) 佐野和子(滋賀大学)「日本の教育システムと女性のキャリア—ポスト子育て期の有配偶女性の就業パターンからの知見—」
- 4) 木村裕貴(国立社会保障・人口問題研究所)・余田翔平(国立社会保障・人口問題研究所)「若年未婚女性のライフコース選好と実現見込みの趨勢とその学歴差」

自由論題 E-1「人口移動」

<座長> 清水昌人(国立社会保障・人口問題研究所)

- 1) 水ノ上智邦(就実大学)「地方圏からの進学転出の非経済的要因についての実証分析」
- 2) 中川雅貴(国立社会保障・人口問題研究所)・小池司朗(国立社会保障・人口問題研究所)・藤井多希子(国立社会保障・人口問題研究所)「新型コロナウイルス感染症拡大期前後の外国人の国内移動—住民基本台帳に基づく市区町村別データを用いた分析—」
- 3) 小坪将輝(東北大学・院)・中谷友樹(東北大学)・田淵貴大(東北大学)「日本における国内人口移動の軌跡とその出生コホート別の差異」
- 4) 丸山洋平(札幌市立大学)「移動経験と家族形成規範意識との関係」

自由論題 C-2「出生2」

<座長> 森木美恵(国際基督教大学)

- 1) 仙田幸子(東北学院大学)「女性の職業の妊娠の結果に対する効果」
- 2) 小西祥子(東京大学)「妊孕力の変化が出生力に及ぼす影響」
- 3) 佐藤一磨(拓殖大学)「出生時の体重は成長後の主観的厚生にどのような影響を及ぼしたのか」

自由論題 E-2「地域」

<座長> 芦谷恒憲(兵庫県・兵庫県立大学)

- 1) 貴志匡博(国立社会保障・人口問題研究所)「東京圏人口増加市における小地域別の転入者、転出者の推計—人口移動が活発な小地域の分布と統計的特徴—」

- 2) 鎌田健司（明治大学）・小池司朗（国立社会保障・人口問題研究所）・菅桂太（国立社会保障・人口問題研究所）・山内昌和（早稲田大学）「地域人口の将来の人口増加率の要因分解と人口モメンタム—地域別将来人口推計（令和5年推計）の結果とシミュレーション—」
- 3) 草野邦明（群馬大学）「4年齢別人口による東京都区部の住宅地域のクラスタリング—8分の1地域メッシュによる分析—」
- 4) 坂井博通（埼玉県立大学）「長野県の人口減少に関する世論」

自由論題 C-3「歴史」

<座長> 高橋眞一（新潟産業大学）

- 1) 津谷典子（慶應義塾大学）・黒須里美（麗澤大学）・石井太（慶應義塾大学）「近世東北農村における家族形成のパターンと要因」
- 2) 黒須里美（麗澤大学）・高橋美由紀（立正大学）「人口移動と出生：近世東北在郷町出身者と移入者の比較」
- 3) 川口洋（帝塚山大学）「種痘導入期の足柄県における天然痘患者の発生状況（1851-1875）」

自由論題 D-1「家族・世帯」

<座長> 水落正明（南山大学）

- 1) 郭訳臨（中央大学・院）・唐成（中央大学）「日本における少子化が家計貯蓄率に与える影響—「日本家計パネル調査」に基づいた分析—」
- 2) 鈴木貴士（国立社会保障・人口問題研究所）「妻が30歳台核家族の従業上の地位の夫婦組み合わせ別子ども数—国勢調査を用いた地域別分析—」
- 3) 藤井多希子・小池司朗・小山泰代・菅桂太・清水昌人・中川雅貴・大泉嶺・貴志匡博・久井情在（いずれも国立社会保障・人口問題研究所）「全国世帯推計からみる2050年の世帯構造」

自由論題 F-1「死亡」

<座長> 別府志海（国立社会保障・人口問題研究所）

- 1) 堀口侑（慶應義塾大学・院）「複合死因データに関するネットワーク分析」
- 2) 井川孝之（明治大学）「新型コロナ開始後の死亡変動の構造分析と将来推計への応用」
- 3) 逢見憲一（国立保健医療科学院）「国勢調査以前におけるわが国の年齢調整死亡率変化の死因構造」
- 4) 高橋眞一（新潟産業大学）「明治期男女年齢別死亡率の地域パターン」

企画セッション3「人間の未来」

<組織者> 小西祥子（東京大学）・梅崎昌裕（東京大学）

<座長> 金子隆一（明治大学）

<討論者> 小池司朗（国立社会保障・人口問題研究所）・菅桂太（国立社会保障・人口問題研究所）

- 1) 小池司朗（国立社会保障・人口問題研究所）「人口の未来」
- 2) 梅崎昌裕（東京大学）「食と健康の未来」
- 3) 島津明人（慶應義塾大学）「働き方の未来—緩境界時代における朗働—」
- 4) 小西祥子（東京大学）「産み育ての未来」
- 5) 馬場淳（和光大学）「人間観の未来」

自由論題 G-1「東アジア 1」

<座長> 丸山士行（暨南大学）

- 1) 鈴木透（元国立社会保障・人口問題研究所）「近代移行期東アジアの人口指標」
- 2) 曹成虎（韓国保健社会研究院）・菅桂太（国立社会保障・人口問題研究所）「結婚難の地域差に関する韓日比較分析」
- 3) 可部繁三郎（福井工業大学）「東アジアの少子化と子育て支援策－選択の観点からの考察－」

自由論題 G-2「東アジア 2」

<座長> 守泉理恵（国立社会保障・人口問題研究所）

- 1) 松倉力也（日本大学）・謝餘慶（日本大学）「中国における晩婚化と非婚化」
- 2) 梁凌詩ナンシー（日本体育大学）「コロナパンデミック前後における香港の少子化－人口移動と出生性比の変化－」

自由論題 F-2「途上国」

<座長> 中澤港（神戸大学）

- 1) 栗田匡相（関西学院大学）・棚橋愛梨咲（関西学院大学）「ネパールの農村における女子学生の幸福度の要因分析－生理の制限に着目して－」
- 2) 松浦広明（松蔭大学）「他の人権の下で存在していた人権を新たに認めるという事：ラテンアメリカ15カ国における憲法上の健康的な環境権の死亡改善効果からのエビデンス」

（岩澤美帆 記）

移民・市民権政策の倫理的ジレンマに関する国際ワークショップ

2024年6月17日から21日にかけて、イタリア・フィレンツェの欧州大学院大学（EUI）において、同大学ロベール・シューマン高等研究所の創立30周年記念事業の一環として6つの国際ワークショップが合同で開催された。筆者が参加・報告したワークショップ‘Ethical Dilemmas in Migration and Citizenship Policies’では、移民政策および市民権政策における解決困難な倫理的ジレンマについて学際的な報告が行われた。ワークショップは、「移住と移動」「難民」「市民権」「定住と包摂」「庇護と不平等」の5つのパネルセッションからなり、欧米を中心に政策担当者が直面する数々の難題について活発な議論が交わされた。筆者は、「移住と移動」のセッションにおいて、紛争や自然災害などの困難な状況下において移動を強制することのジレンマについて報告を行った。

本ワークショップは、ジレンマの「解決」を直接的に目指すものではない。むしろその主眼は、問題の根底にある価値観の衝突や実践的な制約を解きほぐすことを通じて、ジレンマをより良く「理解」することにある。主催者から（筆者を含む）報告者に対し「この問題設定は十分にハードなジレンマとはいえない」というコメントが飛び交うワークショップは初めての経験だったが、安易な「解決」に逃げず、透徹した「理解」に重点を置く姿勢から新鮮な気づきを得ることができた。

（宮井健志 記）